（現代語訳）

稲荷山の霊峰三山を見立てた、三つの灯明を祭壇に明々と焚き、
刀匠 宗近は、心を透明にして、神力の助力が鍛冶の手立てに臨む
ようにと、稲荷明神に一心に祈った。そうして、名刀「子狐丸」
を後の世に残し、その名は広く知られることとなった。

中国に伝え聞く名刀、「龍泉」、「太阿」はどうか知らないが、
この剣は、我が日本の刀匠「天国」、「天の座」、「神息」の三人に
よる国家鎮護の剣にも勝りはするとも、劣らないものだ。
神の力の相槌を、丁々、カンカン、キンキンと、
余所で聞いていても、勇ましい限りだ。

打つと云えば、晩秋の寒夜には麻衣を打つものだ。
どこかで夢見の砧の音が手伝っている。さあ、刀を打つのだ！
田舎も都も秋は更け、
田舎はで時雨に色づく初紅葉が降るように、
鍛冶場では紅葉に色づく鉄が火の粉を降らす。

さあ、真っ赤になった鉄を金床に乗せよ！
鉄を熱する火の加減、水に冷ます湯の加減は大事な秘伝だ。
「焼刃渡し」（焼き入れ）は、刀に命を吹き込み、陰陽を調和させる
絶妙な工程だ。露に濡れて薄く紅葉するように、刀身を水に通す
のだ。熱して赤く輝いていた刀身は、霜夜に凛として浮かぶ月の
ように、澄み切った光を放つようになる。
その腕前は他の追随を許さず、刀身は清く光り、勇ましく在る。
新しい剣は、名工が鍛えた切れ味鋭き名刀として、全国にその名
が響き渡ったのである。

令和三年七月三十一日

大中臣正比呂　拙訳